

郷土芸能文化観光の街を目指す

郷土劇場 野球拳会館設立に向かった提案

本家野球拳 澤田剛年

野球拳は、地元の人よりも県外の方が興味を持たれています。

その理由として、野球拳は全国的に最も知名度のある遊戯であります。誤解をされている部分があり、それを地元が大真面目に正当野球拳を伝承、開催しているのが大変興味深く面白いという評価です。野球拳には、本来 4 番までの歌詞があり「日本国中 えっさっさ」「松山人よ、負けるな。どんな時もガンバロー！」「みんなで大いに盛り上がりよう！」というメッセージが含まれております。松山が発祥であり、家本制度で伝承しており、春まつり野球拳全国大会を始めとして松山まつり野球拳おどり、そして全国的イベントに郷土芸能としての参加、マスコミやテレビ番組の出演等、年間を通して活動はしておりますが、肝心の観光客と地元の認識に対しての体制が不十分です。

そこで、年間を通して愛媛に来られたお客様に観光名所を巡っていただき、夕食後のひと時を郷土劇場 野球拳会館で観覧、参加して楽しんで頂き、良い思い出の旅にする。現在、道後坊ちゃん広場で開催している郷土芸能大会に出演して好評につき、その必要性を痛感しております。地域とともに文化の活性化を目指し、これから 10 年、50 年と続いていく郷土芸能や野球拳の将来を考えて、観光と一体になる場所を作り、継続する大切な基盤を作らなければなりません。

次世代の育成を通して、邦楽の各文化教室、郷土芸能や演奏が年中観覧できる舞台設備、野球拳ミュージアム、特産品のショップなどを完備した、万人が心を癒し体を健康に保つための郷土芸能を中心とした施設として郷土劇場 野球拳会館の設立を提案いたします。ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

郷土劇場 野球拳会館の目的

1. 郷土芸能文化観光都市の発展・センスアップ・PR
2. 野球拳に関する全てのまつり・行事・イベント等の協力
3. 松山の歴史「野球王国松山」野球というコンセプトの明確化。
野球王国松山の歴史を知らせて理解してもらおう。
4. 野球拳資料展示場
5. 年間を通して舞台での郷土芸能の披露
6. 次世代に対しての伝承・指導育成(歴史・踊り等)
7. 邦楽楽器の指導育成(和太鼓・お囃子等教室)
8. より幅広い芸能文化の創出、地域活性化への積極的な支援。
9. 保育所・学校・福祉施設等での教育福祉活動の支援。
10. イベントの企画およびプロデュース

様々な音楽が集う場所。なによりもそれらの音が融合し人々の心に響く空間を創り出せることを目標に愛媛の地で開催される舞台です。人々が集まって自分たちが参加する場所で様々な郷土芸能を身体に浴び新たな創造へのエネルギーを蓄える場所。生きるためのエネルギーが響きあう、ひとつの音が生まれ、その響きは人から人へ伝播していきます。小さな一点から広がる波紋は、人々を時に激しく時にやさしく揺さぶります。

ここで生まれる波は小さくても観光の美しい波紋のひとつになれるよう。

郷土文化を次世代へ継承し、社会の活性化に寄与することや和太鼓による郷土芸能保存し、町内外で演奏を披露することで、町の活性化、更には県外へ愛媛をPRすることを目的にします。

郷土劇場 野球拳会館のイメージ

- 観光客・市民が郷土芸能を楽しみ、歴史や演技・演奏を習得する空間
- 場所は観光の地(道後が最適)
- 広さは 50 坪前後
- 館内には常に郷土芸能の曲が流れている
- 館内入って受け付け・展示場・くつろぎ空間・特産品
- 内部には演技舞台・練習広場・控え室・事務室・浴室・炊事場・トイレ

野球拳について

野球拳の歌詞

一 野球するなら こういう具合にしやしゃんせ 投げたら こう打って 打ったら こう受けて ランナーになったら えっさっさ アウト セーフ よよいのよい じゃんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい	三 本家野球拳 こういう具合に若返ろ 投げたら こう打って 打ったら こう受けて 日本国中 えっさっさ アウト セーフ よよいのよい じゃんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい
二 踊りするなら こういう具合に野球拳 投げたら こう打って 打ったら こう受けて 釈迦もエンマも えっさっさ アウト セーフ よよいのよい じゃんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい	四 ホンニーそうじゃけん こういう具合にやりましよや 投げたら こう打って 打ったら こう受けて 道後のブンブにえっさっさ アウト セーフ よよいのよい じゃんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい

インターネットで全国に一般公開されている野球拳の資料

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

野球拳(やきゅうけん)

愛媛県松山市に伝わる郷土芸能、宴会芸。

ジャンケンで負けた相手の服を脱がせるゲーム。こちらの意味がより一般的。

野球拳(やきゅうけん)とは、愛媛県松山市に伝わる郷土芸能、宴会芸である。

1924 年、伊予鉄道電気野球部が高松市での高商クラブとの試合後、旅館で行われた対戦相手との夜の懇親会で披露したのが始まりである。当時伊予鉄野球部のマネージャーをしていた川柳作家の前田伍健(1889 年 - 1960 年)が、即興で作詞作曲・振付けをしたものであった。

これは、芸者の三味線と太鼓を伴奏にした、いわゆる勝ち抜きジャンケンゲームで「♪アウト！セーフ！よよいのよい！」というかけ声と野球の審判のジェスチャーを踊りにしたものである。

この踊りを松山に持ち帰ってからは、宴会芸の定番となる。その後、松山まつりでも取り入れられ、1965 年から各団体の連が街を練り歩くようになった、松山市制百周年記念の 1989 年からはサンバ調の野球サンバも加わるようになった。又、1968 年の松山春まつりから松山城で本家野球拳全国大会が行われている。

尚、「お座敷演芸」故に負けた方の罰則として服を脱いだりしたのがテレビのバラエティ番組「コント 55 号の裏番組をぶっとばせ!」で全国に広まり、「野球拳は、ジャンケンで負けた相手の服を脱がせるゲーム」となったのだと思われる。一般的に郷土芸能の方はあまり知られていないので、単に「野球拳」と言えば後者の意味に取られるかもしれない。

春まつり・夏まつりの野球拳について

● 松山まつり 野球拳おどりの展望と課題

▶ 全国に通用するまつり

誰もが知っている野球拳、その発祥の地のまつりを全国へアピール。

どこにもない、新しいまつりを目指して1年がかりで改革に取り組む。松山らしい伝統を残しながらオリジナルのまつりの形態づくり。

▶ 松山の歴史「野球王国松山」

野球というコンセプトの明確化。市民に野球王国松山の歴史を知らせて理解してもらう。

▶ 野球をメインにしたまつりに

「松山＝野球」をメインに打ち出していき、名称を「野球拳まつり」にするなど、まつり全体を通して、一貫した「野球」というコンセプトが感じられるまつりにしていく。

▶ おどりの、曲及びおはやし、音響機材の自由化

よさこいのようになるのではなく、生演奏のお囃子で魅力的な音楽へと発展していける展開に。

踊りと一緒に演奏するようにし、お囃子参加者にも、まつりと踊りを楽しんでもらえるように工夫。

広く市民に呼び掛けて、お囃子のサークルを結成し指導しながら音楽も充実させる。

▶ センスアップ松山まつり

松山の伝統・歴史を感じさせながらも、若者からも受け入れられる新しいセンスを取り入れ、魅力あるまつりを目指す。マスコミ、パンフレット、ポスター、ステッカー等。

▶ 老人から子供まで

参加しやすいまつり、参加して楽しいまつり、観客が楽しめるまつり。

▶ 参加者の一般公募

市民の誰もが気軽に参加できるまつりを目指して、連の一般公募を徹底する。

▶ 福祉の充実...誰もが参加できるまつりに

障害者の方のため施設の設置を、事務局サイドでも積極的に取り組んでいけるように。

▶ 観客へのサービス

観客席の整備や、ガイドマップの作成、案内所の設置など。

▶ 観客も一体となれる仕組みづくり

観客へのまつりグッズの無料配布や、観客による一般審査員、飛び入り連など、踊る人、見る人、が楽しく一体感あるまつり。

▶ 広報の充実

まず市民に「まつり」を知ってもらう。各TV局や、新聞・雑誌等のマスコミ各社に、積極的な報道を。

● 松山春まつり野球拳全国大会の展望と課題

松山市丸之内の松山城山頂広場で、松山春まつり・お城まつりの行事の一つ、第39回野球拳全国大会が開かれました。この日は晴天に恵まれ、2007年を4,500人程上回る、約8,000人の観客が見守る中、3人1組で過去最高の71チームが参加しました。野球拳のルールはじゃんけんで先に3勝した方が勝利。参加者は、協賛商品を目指して、本家野球拳お囃子の演奏に合わせて踊りながら、真剣勝負を繰り広げました。鎧や伊予万才という個性的な衣装に身を包んだ参加者らはきれいな桜が舞う中、お弁当を食べながら競技を楽しんでいます。

現在、他県数か所で松山春まつり野球拳全国大会を参考にしたイベントが開催されているのには嬉しい驚きですが、松山の野球拳全国大会も、上記の松山まつり野球拳おどりの展望と課題に加え、本当の意味での正当野球拳の全国大会に発展させなければなりません。

松山の郷土芸能について

秋祭りの頃ともなると四国各地の農村では、あちこちから賑やかな鉦や太鼓のリズムが聞こえてくる。野球拳は愛媛に息づいている伝統芸能の一つであります。

伝統芸能は庶民の生活の中から芽生え、長い歴史の風雪に耐えて円熟しながら成長した貴重な祖先の文化遺産である。我々は伝統的芸能を通して昔の生活文化に触れることができるが、それぞれの地域の特性に根ざした数多くの伝統芸能が、明治以降、とりわけ大戦後の急激な生活構造の変化や意識の変遷によって、次第に風化しつつあるのは惜しまれてなりません。

そのため現代の若者のフイリングにも合うようにアレンジして、全盛を維持しているものもあるし、また一方現代的な感覚で全く新しく創作されたものもある。「野球拳」は後者の例である。現在残っている伝統芸能は、何れも時代の変遷に耐え得た価値の高いものばかりであるが、風化～滅亡を防ぐための保存会等の献身的努力が裏打ちされていることを忘れてはならないと思います。

◆野球拳

四国はもともと野球の盛んなところである。そもそもアメリカ生まれのBaseBallを「野球」と命名したのは松山出身の俳人正岡子規だといわれている。全員で唱うリズムに合わせて、対峙する二人がキャッチボール、打撃、応援、審判等思い思いの所作をしながら「野球するならこういう具合にしやしゃんせ・・・アウト セーフ ヨヨイのヨイアイコでホイ！（勝負）」負けの方はすげすごと自席に戻り、替わりのものが出て先の勝者と勝負する。周りの一同は勝負のつくまで三拍子の拍手で応援するという至極単純なものである。

他愛のない遊戯ではあるが、「松山まつり」をはじめ、各種の催しに取り入れられて、愛媛の代表的な踊りとなった。



記録によれば大正十三年の秋、伊予鉄野球部が高松市へ遠征し、屋島球場で対戦して惨敗した夜のできごと。親睦会の隠し芸でも香川勢に圧倒された愛媛側の一人が、意表を衝く一策として自作した即興歌が発端であるとのこと。松山へ帰ったの残念会でも披露されて大人気を博した野球拳は、その後もいろいろな機会に行われ、一般にも流行して行ったのだという。全員参加のゲームであり、リズムや動作の面白さに加えて、適当なスリルもあるのが現代人の感覚にフィットした好例であろう。

◆伊予万歳

「沢山の万歳見せうお国ぶり」と正岡子規が詠んだ伊予万歳は、農村娯楽として明治末から昭和10年頃にかけて、北条市を中心として松山平野及びその周辺一帯に普及し、祭礼や縁日の余興として盛況を極めた。源流は愛知県の「知多万歳」であるといわれている。

最初は初春を祝う万歳芸であったが、その後、浄瑠璃や歌舞伎の影響を受け、語りや小唄踊りを入れるなど多様化して、現在は祭礼や個人の家の慶祝等にも招かれて芸を演ずる。県下に数チームある保存会の活躍で県内外に紹介され、観光にも一と役買っている。小道具の扇子やボンテンを巧みに操り、数人のチームで三味線や太鼓の賑やかな囃子に合わせて踊る華麗な演芸である。

芸題のレパートリーは広くて、保存会ごとの特徴があるが、リズムのテンポが早いものや遅いもの、またそのミックス等多種多様である。



◆虎舞

賤ヶ嶽七本槍の猛将の一人である松山城初代城主、加藤嘉明が淡路の志知城から、伊予松前城主となったのは文禄四年七月二十一日のこと。慶長二年二月豊臣秀吉の第二回朝鮮出兵に伊予の勇士二千四百人を卒いて出征し、大いに奮戦、敵首千五百三十五を得ました。越えて慶長三年春、嘉明は朝鮮の山中で、虎狩を行ない猛虎を獲得し、その頭と皮を秀吉に献上したところ、大いによろこばれたと伊予古文書に記録されております。この猛虎狩の様子を虎舞に取り入れて、以来毎年十月の秋祭りに、これを踊り継いで今日に至ったものです。なお、朝鮮虎は尻尾の先が黒いのが特徴であるといわれています。



◆伊豫之國松山水軍太鼓

昭和54年4月に松山市制90周年を記念し、創作された松山の新しい郷土芸能であり、その昔瀬戸内海で活躍した河野水軍の戦いのドラマを和太鼓で表現したものです。

現在では、より市民に親んでもらおうと松山市内の全小・中学校に太鼓のセット(大太鼓×1、中太鼓×2、締太鼓×6)がセットされており、松山市内各地で演奏が行われています。



能や狂言、歌舞伎(かぶき)などは日本を代表する伝統的な芸能といわれています。

これらは専門の役者さんや脚本・舞台を作る人、お囃子(はやし)という楽器を演奏する人たちが一つの舞台芸術として長い年月をかけて作り上げてきました。

一般的にはこれを「伝統芸能」や「古典芸能」という。これに対して、農家など普通の人たちが長い習慣として続けてきた芸能を「郷土芸能」や「民俗芸能」という。伝統芸能の元は郷土芸能から始まっていて、この二つはとても深い関係があります。何もかも忘れて熱中する。その姿が神様を喜ばせると昔の人は考えたし、自分たちも楽しんで、気分をリフレッシュして、また普段の厳しい生活に帰っていった。郷土芸能は昔の人にとっていい気分転換にもなったようです。

このような特別な日を「ハレ」という。ハレの日は特別な食事を食べ、特別な衣装を着て、特別な行事がおこなわれ、非日常の世界に入る。そして終われば、また日常の「ケ」の世界へもどっていく。その「ハレ」の日の行事が、郷土芸能として残っています。このハレとケの繰り返しが、私たち日本人の生活のリズムを作っていました。都会に住んでいると、なかなかこうしたリズムを感じることはできないけれど、日本人の血の中にはちゃんと残っていて、祭りとなると仕事も放り出して、熱中する人もいます。日頃のつらい作業もハレの日があるから、がんばる。昔の人にとっては、大切な気晴らしの日だったのかもしれない。愛媛県にも多くの素晴らしい郷土芸能があります。その伝統芸能を広くたくさんの皆さんに見ていただき、多くの感動を感じて欲しい、そしてその伝統を永く伝えていきたい…。そういった想いの有志が集め設立されたら素晴らしい事です。

演技者、演奏者は、長く厳しい修行を積み重ね素晴らしい技を身につけております。心に響く歌、太鼓、三味線、また踊りも、心を動かすものをお見せできると思っております。

これらの郷土芸能を年間を通して毎日見て体験出来る施設が観光にも市民にも必要です。

和太鼓を中心とした野球拳(野球拳太鼓)

誰にでも簡単にできる健康的な和太鼓(福祉、教育、趣味、体作り、精神安定)

太鼓は大人も子供も「打てば響く」反応が得られ、誰でも演奏できることから、もっとも親しみやすい楽器といえるでしょう。しかも音楽表現の三大要素である「音の強弱」と「美しい音色」、曲に「ふさわしい速度」が自由自在に表現できます。

つまり、リズムやテンポ、ボリュームの変化によって、自分だけのイメージを思いのままに表現できるのです。また、全身を使って太鼓を打つことで、身体的にも運動能力の向上や、姿勢の矯正などにも役立ちます。これからの教育には、子供たち一人ひとりの個性を生かし、自主性や創造性、道徳性などを育てることが強く望まれています。

音楽で言えば、楽器や歌唱を通してそれぞれの心の中にあるイメージを表現することで、自分の想いを相手に伝える自己表現能力や創造性が育てられます。年齢、性別、技術力の壁を越えた部分で、一人一人が出来る範囲、やりたい範囲、表現し伝えたい範囲を大事にしなが、後世に伝えたり心豊かに人生を築いていく。

文部科学省の新教育指導要領の実施にともない、2002年から義務教育ならびに高等学校教育に、太鼓をはじめとする邦楽の授業が取り入れられました。

この年齢、性別を問わない健康的な和太鼓を野球拳に取り入れ、市民が積極的に取り組む事により生きがいや観光に繋がることを願っています。

和太鼓について

日本太鼓は、古来より神事や祭礼において、または伝達手段として重要な役割を担う楽器として伝えられてきましたが、最近では伝承、伝統音楽としての太鼓のほか、新たに創作太鼓が加わり、音楽の一分野として日本太鼓が確立されております。各地の太鼓が郷土の特色を色濃く伝える伝統芸能、民族芸能、和太鼓の伝統を正しく継承、保存するとともに新たな創作活動の普及、振興を図るため各種の事業を展開、政府奨励による地域活性化を目的とした「ふるさと創生」事業のひとつとして、全国各地に多くの太鼓チームが結成されました。

近年では、日本太鼓は日本の伝統音楽として、地域社会における評価が高まり国内で目覚ましい発展を遂げております。特に太鼓に向かう真摯な態度や、団体演奏に必要なチームワークの大切さから、礼と節が備わることが評価されております。全身を使っての演奏は体力づくりとして、また、太鼓のリズムは生活のリズムを養うことに結びつくものとして注目されております。明治以来、日本は西洋文化に傾倒してきましたが、それは自らのアイデンティティーへの渴望をもたらしました。

たとえば現在、活性化と称して地域を地盤とした太鼓グループが各地に生まれています。そうした動きも、自国が誇れる文化への欲求のあらわれではないでしょうか。太鼓の魅力は何であろうか。

私たちは祭り太鼓の音を聞くとなぜか落ち着かない。心が浮き立ってくる。そういえば太鼓は、原始時代の狩りの出陣の合図であり、また豊漁を祝う祭りの音曲であったろう。そんな謂われのある太鼓だからこそ、現代の無機的な生活に呻吟している我々の狩猟本能は敏感に刺激されるのではないのでしょうか。私たちが太鼓の音にいわれなき恋しさを感じるのは、その音に亡き恋人の面影を探し出すかのようなやせなさがあり、空腹を抱えた狩人がご馳走にありつけたかのような充実感があるからであろう。だからこそ私たちは太鼓の誘惑には勝てないのです。

現在の活動

本家野球拳四代目家元・和太鼓雷人・松山まつり運営会副会長・松山春まつり野球拳全国大会実行委員会会長
和太鼓澤田道場主宰・文化庁芸術家等派遣事業文化大使・フジカルチャーサークル講師
道後温泉郷土芸能ショー出演(日本の旬キャンペーン)

現在進行中の参考資料

野球拳おどり和太鼓練習会・体験会のご案内

あなたの連に和太鼓が入ると、より魅力的です。

本年より、野球拳おどりを更に盛り上げる為に、和太鼓の指導及び練習会を開催いたします。和太鼓の導入を検討したい連の方々は是非ご参加いただきますよう、ご案内申し上げます。

和太鼓で野球拳おどりを元気に！

野球拳おどりに市民がまつりのあらゆる部分で自主的に参加する事、夏祭りが近づくに連れ地域の隅々からまつりのお囃子が聞こえ、夏祭りの本番には、大多数の市民がこれに参加し、参加者が本当に楽しめる、まつりにしなければなりません。現在の野球拳おどりでの音響は、一括した音を音響車のスピーカーから流す方式であります。将来的には各連が独自のお囃子連を持ち、そのリズムも個性的にしていく方が、より盛り上がりがあるものと思います。まずは、本年の松山まつり「野球拳おどり」を和太鼓で盛り上げる人に向けての試みとして、野球拳おどり各連、希望者を対象に和太鼓・チャンチキ・(将来的には篠笛・三味線も！)の講習会を開催したいと思います。これらの楽器は、割合簡単そうに見えますが、本当の音やリズムが出るまでには数年の経験が必要です。しかし、それでは本年の夏まつりには全く間に合わない事になり、参加者も全く見込めない事になります。そこで、具体的に1ヶ月間の短期コースで、とりあえず基本的な演奏ができるよう講習会を開催いたします。

和太鼓について

太鼓愛好者は、子供から高齢者にまで年齢層が広く、最近では主婦をはじめ女性グループも増え、男女の比率も均衡してまいりました。また、健常者のみならず身体・知的障害者のグループも誕生しており、太鼓演奏が心身の療育に寄与することが立証されております。さらに、日本の伝統文化の海外における紹介のうち、特に太鼓の海外演奏は、「日本の心」を伝えるものとして高く評価され、海外からも大きな関心が寄せられております。全国和太鼓フェスティバルいずれもスケールの大きさと音楽レベルの高さで注目を集めます。

まつりには欠かせない太鼓！

なによりも、それらの音が融合し人々の心に響く空間を創り出せることを目標に松山の地で一年に一度開催される舞台です。和太鼓を演奏する者が集まって自分たちが演奏する音で新たなる創造へのエネルギーを蓄えるまつり。生きるためのエネルギーが響きあう、ひとつの音が生まれ、その響きは人から人へ伝播していきます。小さな一点から広がる波紋は、人々を時に激しく時にやさしく揺さぶります。私達も響かせましょう、松山から天に響く音を！

1. 開催日時 平成20年7/8・7/15・7/22・8/5 火曜日 18時～21時
2. 場所 愛媛県生活文化センター3F 大広間
3. 主催 松山まつり実行委員会
4. 講習内容 野球拳踊りのお囃子について基本を習得。
ウォーミングアップ・バチの持ち方・構え方・基本打法・音の強弱
テンポ・アクセント・楽曲練習その他
5. 受講料 無料 (別途 バチ代2000円)
6. 講師 本家野球拳・和太鼓澤田道場・和太鼓雷人(澤田剛年・若谷知代)

本家野球拳四代目家元
和太鼓 雷人 太鼓士 澤田剛年

